平林たい子全集

6

潮出版社

平林たい子全集 6

昭和52年 5月20日　印　刷
昭和52年 5月25日　発　行

著　者・平　林　た　い　子
装　幀・伊　藤　憲　治
発行者・島　津　矩　久
発行所・株式会社　潮　出　版　社
東京都千代田区飯田橋 3－1－3
電話 東京(03)230－0741(販売部)
230－0781(編集部)
郵便番号 102
振替 東京 5－61090

印刷 第一印刷株式会社　製本 株式会社 鈴木製本所

© 1977 Shinko Teshirogi　Printed in Japan
乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします

検査済
52.9.10
庶務課

目
次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

愛情旅行……7
殴られるあいつ……175
解説・奥野健男……511

平林たい子全集

6

愛情旅行

愛の使者

あやめは珍しく家にいて、卓(デスク)で算盤をしたり指輪の掃除をしたり、とりとめない事に時間を費した。プリーツ・スカートに掩われた、たっぷりした腰はその間中腕椅子のスプリングをいやというほど窪ませて暖めていた。が、ふと崩れた襞を揺ぶって、そばの三面鏡の卓から、さっき見た新聞をも一度とりながら、

「いいお天気……」

と空の白いほどまぶしい光の層を高窓から眺めやった。

「こんな日に逢曳(ランデブー)なんて三枝子さん洒落れてるな」

と思わずひとり言を言った。が、立上った拍子に女中のしず子が紅茶をもって入って来たので、声はつぶやきとなって唇で消えてしまった。しかし、いくらかはしず子に話しかける気持であったかも知れない。こういうむず痒い秘密をまもっている胸はむずつくのでとかくひとに喋って冷ましたいものなのである。

しず子はきこえたらしく曖昧な笑い方をして、紅茶をさし出した。そのまま立って、いまの新聞を横合いからよんでいた。

二十四のしず子は女学校を出てから、五年もこの家につとめていた。いまでは文房具店主のあやめのるすの間、夫の来客を手ぎわよく捌いて押しも押されもせぬ主婦代理であった。あやめはよくしず子のさし出たふるまいをこぼすけれども、はたから見れば、結構気が合って重宝にしているのである。

しず子はしばらく政治面をよんでいたが生意気な口調で、

「奥さん、この分では遠からず解散だと私は見ましたね。こんどこそ手廻しよくなさらないとまた大変ですよ」

「さっき私もそこをよんであなたとそっくりなことを思った所だったのよ」

とあやめは、白い額の黒い眉を柔かく動かした。

「選挙のことを思うと、私地獄めぐりという感じがするわ。ああいやだ……いやだ……ぞっとする」

という自分の言葉と一緒に、井の頭に行った友人の三枝子を思うふわりとした気分は忽ち現実の瓦礫みたいなものの上にたたきつけられていた。

この前とその前二回つづけての夫津田の落選ぶりのみじめさ。特に二回目のときあとから燃えあがった違反検挙の月も向けられないはげしさを思うと身の毛もよだつ思いがする。

「こんどこそわたしはかかわらないつもりよ。絶対にかかわらないわ。あんな浅ましいことってありゃしない」
と誰かを罵るようにあやめが叫んだとき、卓上の電話のブザーが鳴った。
「もしもし、あら！　三枝子さん、どうなすって？」
「どうもこうもないわ。あの人来ないのよ。もう一時間半このホテルで待ち呆けよ」
「だって、あれほどはっきり承知したのに――」
あやめは使の役をした責任をいささか感じて言った。
「お願い。あなたからも一度あの人に電話して――。私の声はもう危くてかけられないわ」
といつも同じことをたのむ三枝子だった。
あやめは、笑くぼのある指で電話の数字盤を廻しながら、何故ともなく、
「やれやれ……」
とうなった。あやめがこの卓で使っている電話番号簿に、自分では全然用事のない名前が二つのっている。二つとも三枝子のノートからそのときどきに写しとらされたものだった。
はじめのは、三枝子とあやめの女学校の先生石木あや子の弟で、技術者の官吏だった。三枝子は先方の細君に嗅ぎつけられると、その道の知恵で、あやめに仲介をたのんだ。あやめは、苦笑しながらも少なからぬ情熱をもって石木家に電話をかけた。
「奥様この頃いかが。お寒いですわね。また御主人さまに店の電気のことで御相談したいことがございますの。恐れ入りますがお電話口までちょっと……」
と、猫なで声でよび出しておいて、空恐ろしい三枝子の逢曳の打合せを伝えることにしていた。
が、ひょっくりある時から三枝子にたのまれる局名も番号も変ってしまった。
こんどは、文化大学の少々有名な石上教授である。三枝子は先方の夫人を知らないのをよいことに、はじめは堂々と自分で頻繁に電話をかけた。が、女の感覚の繊細さはこんな曲事を防禦するために天が与えたものなのであろう。いつのまにか、
「もしもし……」
と三枝子が特徴のある高い声でよびかけるのと一緒にガチャンと電話は切れてつんぼという言葉の感じのような無音響が耳に伝わるだけである。が、三枝子は、こんなとき、日頃の誇(プライド)さえ麻痺していて、ただにやにやして力なく受話器を置くだけである。結局またいやな役があやめに与えられることになった。が、きょうのあやめはいつも以上に気が弱い。いかに自分の用事でないにしても、石上夫人の声にこの自分の耳でじかに触れるのはいかにも心地が悪い。所が、「女中であってくれ」という希いがふしぎに叶って、「旦那さまは、さき程お出かけでございます」
という可憐な声がきれいなリズムで耳に伝わって来た。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

あやめはほっとして、すぐ、三枝子のホテルにそれを伝えた。時間の関係から推して、石上がはたして井の頭に向ったものかどうかは疑わしい。けれども、それはもうあやめの参与できない範囲の問題だった。

利巧な女中のしず子は、このからくりの一端をずっと前から嗅ぎつけているので、電話の間中、すうとどこかにいなくなっていた。が、あやめが卓上電話器を置くか置かないかに現れて、

「いま、城西パチンコ協議会の人が来ましたけれど井上さん（秘書）がいないと言いましたのですぐかえりました」

「そう」

と言ったきり、あやめは無表情である。これだけ政治の泥がついた夫津田に、いまさらパチンコ屋組合顧問だけを忌避させても仕方がないとあきらめてはいる。けれども、パチンコ屋ときくたび、雑巾で顔を撫でられる思いがするのは仕方がない。——

その時また電話のブザーがなった。

やっぱり、石上は、三枝子と約束した場所に行かなかったとあやめは直感して、辛い面持で受話器をとった。と、ききなれた夫津田のはげしい声で、

「あやめか。大変だ。議会が解散したよ。弱った」

あやめがなにか聞こうとしたら、電話はそれだけで切れた。

「しず子さん、議会は解散よ」

「しまった！　一と月早かった」

あやめは笑い出したが、笑いごとではなかった。

「さあ、お金です、問題は。うかうかしていたらまたこの前と同じになります」

「私はこんどこそかかわらないつもりよ。たまったもんじゃない。お金をスコップで投げ込むんだもの」

「そんなこと仰有ってたっていまに見ていてごらんなさい。銀行からお店の運転資金をすっからかんに引出すから。そして皆のはり方が気に入らないといって御自分でポスターはりの梯子をかけて、奥様のあられもなくよその家の高塀にのぼって行って——」

「もういいわよ……。ほんとにばかだわねえ、私っていう女は。女っていくど陣痛で懲りてもまたお産をするでしょう。あれを私は選挙でやっているのかも知れないわ」

とあやめはため息をついた。

全く、冷静な毎日には、十年つれ添った津田は、切実にありがたいわけでない麦飯のような日常的存在であった。それには、南方の司政官として引揚げて来たとき、つれて来たマレイ婦人を、神戸の収容所に置き放しにして帰らせたということも芯に凝っていた。それに、保守党への反感もあって、政治で汚れた夫のある面にも溝を感じている。

ところが、彼が一たん選挙のプレートに立つとあやめの気持はガラリと変った。急に彼がいとしく切なく、津田を当選させなければ、このさき、自分の生きる瀬がないほど

ひたむきに思いつめてしまう。正直の所、こんども解散と電話をきいた瞬間もう銀行から先日借り入れた店の拡張資金のことがちらりと閃いていたのだった。

しず子はそれを透視したように、

「奥さん、忠告しておきますけれど、こんどこそ事業のお金をお出しになったらだめよ」

「そりゃ、私だって、選挙は水物なんだから、私の金なぞなければないでどうにかなる位の隠微さは知ってるわ。だけどもその場になると惑乱しちゃうのね」

「でも、こんどは、この前よりはいいんでしょう。夜間大学からだって融通がつくでしょうし……」

「……ええ、そりゃいくらかはね」

あやめは気がついて遅蒔きながら口をつぐんだ。知らぬ間にこんな手許にまで彼女をくぐり込ませたことを後悔した。

夜間大学の講義料が時間給で月税引き三千五百円。が、賢いといっても、しず子の世間智は、この家に来てからの見聞からだから上辷りしている。津田が夜間大学で、講義することになったのを、大変な高給とりになったことと思い込んでいる。

が、あやめは夫のためにその幻影だけはこわすに忍びなくて今日までひたかくしにして来た。

それに、事につけて、津田の不平を言うけれども、しず子が相槌を打つと急に津田がかわいそうになるくせがある。そして、逆に弁解の側に廻るのをしず子が軽蔑している。

解散

その晩津田は、保守党の公認をとるためあちこち駈り廻った。

夕方立派なハイヤーでかえった秘書の井上は、こんな非常時にも、ポケットから白ハンケチをのぞかせて、髪には、光る櫛目を入れていた。彼は、かるく茶の間の廊下に膝をついて、

「ひょっとすれば、先生は山本総務の応接間で徹夜なさることになるかも知れないそうです。六十人という面会人がつめかけているのですからね」

「六十人！　それがみんな公認志願者なの？」

あやめは、紫檀の食卓で、夕刊を手にしながら目を瞠った。彼女は味気なさを紛らすため今晩はばかに入念に化粧していた。が、広い額は気懸りで曇って、長いまつ毛に翳がある。

「そういうわけでもありますまいが、大変なのは、この第〇区から十二人も公認運動者が行っていることなんです」

「それじゃ、こんども、だめね」

あやめは、自分の一番の危惧に先廻りをして言った。見せまいと思うけれども、やはり正直に力を落していた。

「いいえ、準公認なら大丈夫です。それで、先生からのお言伝てで、総務への公認運動料三十万円をあしたの昼までに用意しておくこと。それから、駅前の魚屋を選挙事務所に早く手廻ししておくため二十万円、パチンコ協議会の末吉さんが来ます。うかうかすると、他の候補者にとられてしまいますからね」

「そんなお金がどこにあるのよ……」

あやめは、昼間、こんどはかかわらないと口をきわめて言ったことを思い出していた。それをきいていたしず子の手前、口調は冗談めかした自嘲になった。あのとき直感したように、店の拡張のためかりた三百万円は、マンモスのような、選挙という動物の餌食となって、忽ち食いつくされてしまう運命が見え透いた。しかしあやめは、やっぱり抵抗していた。

「じゃあ失礼します……」

井上は、あやめの口吻には取合ず、折目正しいズボンをゆすりながら、内玄関に出て行った。

「一体あんな秘書で選挙ができるのかしら。あの人にできる仕事といえば、仮縫のときうしろの寸法を見たり、犬の血統書の贋ものを獣医に書かせたり……」

しず子はあやめの誘い込まれそうな話題のわなで、彼女の陥込むのを待っていた。しかし、あやめは、今夜こそ自分一人の心にこもって考えたいことが沢山あった。

あやめは、柔かいちりめんのスリーブの上膊に括れたあごをのせてまつ毛をそっと上下さわらせながらふし目になっていた。と、せつ子という女中が現れて、

「市川さんという方がいらっしゃいました」

「市川さん？　どなたかしら」

と言ったもののあやめには心当りがあって、自分で玄関に出て行った。プリーツのスカートがけわしくゆれる奇妙な足どりだった。

「あら！」

とあやめは柔かい脂肪性の咽喉の奥で叫んだ。

「よくいらっしゃいました。さ、どうぞ」

「津田先生はまだ帰られないんですか」

立っている三十一二歳の市川は明るい風貌で服装や礼儀なぜ気にかけない方らしい。めったに逢わない大学の先輩津田の夫人あやめに対して、毎日逢っている人のようにといかける。

「何か津田に御用事？」

「いや、僕こんど、党の命令で長野県から立候補することになりましてね。今晩の夜行で発つんですが、ひるま、議会の傍聴席でお目にかかったとき、同窓会の職業別名簿を貸して下さるという話だったものだから、来てみたんです」

「そう！　貴方も――。勿論民衆党からですわね。公認は？」

「党の命令ですから、勿論公認でしょう」

あやめは、自分の質問に表白された世間知らずをはずか

しく思って、ちょっとだまった。
「とにかく上ってお待ちになりません？　電話してみますわ」
　市川は、いそいでいるようで、しばらく考えていた。が、あやめの気持にひきずられて靴をスリッパにはきかえた。
「さあどの室にしましょうか？」
　あやめは、妙な独言を言った。そして、応接間の方に落着きなく先に歩いて行って、
「やっぱりここがいいわね」
　と洋間のハンドルを引いた。
　市川は、あやめの挙措も目に入らないほど一本調子にその室に入って、ディヴァンにどさりと腰をおろした。スリッパからはみ出した靴下の手編なのが、そのときあやめの目をひょいと惹いた。
「選挙って、大金のいるお祭みたいなものですわね。わたし、もうとても倦きてしまいましたのよ」
「保守党だからなあ、津田先生は――。勿論僕等だって、お金はいくらあってもいいけれども、とても津田先生のようにはできませんから、あるだけでやりますね」
「だって要るでしょう？」
　という短い言葉に、一切の選挙中の行事を、あやめは具体的に含めたつもりだった。
「要りますよ。だけども、たとえば、労務者にしたって、僕等のは、大抵党員の奉仕ですよ。僕は、この前県会をやりましたが、自分で学校の教室のかべにスローガンをはってから喋って、またそのスローガンを外して巻いて、次の会場に行ったこともありましたよ。案外、そうなると、聴衆が来て一緒に手伝ってくれますね。そして、その手伝った人は、皆僕に入れていましたよ」
「まあ！　自分でポスターをはるんですか」
　あやめはおどろいて叫んだ。そのとき、あやめの目の中には、選挙となると、井上に外からうやうやしく自動車の扉をあけさせる津田の戦術が泛んでいた。
　いままで一度もじっくり話したことのない市川だったが、あやめは、何故か彼の前に出ると足を掬われるような感じに脅かされる。きょうも、この応接間にさし向いで坐ったはじめは、自分の形よい鼻梁をうすく自分で見ながら、下を向いたきりだった。
　この年になって異性にはにかむのかと自分で腑甲斐ない感じがしないでもない。が、ゆったり坐っている市川の体全体から水道の水のような強い圧力あるものが迸り出ているようで、とても目が向けられなかった。
　あやめはゆるく波打った艶のあるショートカットの髪で、市川の顔の焦点を防ぎながら、顔を見ず声だけきいて応対していた。
　若々しくてよくとおる市川の声には、演説できたえた渋味も添っていて、何の気なく喋っているときにも、罪のない声調があった。

「奥さんは、百姓生活を御存じないでしょう？　都会以上に知的なものですよ。私の所では、委員が灌漑溝の水温や、稲の長さを毎日調べて記録して、例年の成長工合と比較するし、稲株の分蘖工合や一升の米粒の数までかぞえてね、耕作法を研究するんですよ。こんな実際的な連中に、東京の聴衆に喋るような甘ちょろいごまかしを言ったって、すぐ見破られてしまいますからねえ」

市川がそう言ったとき、あやめはふと顔をあげた。その「甘ちょろいごまかし」という言葉は、てっきり夫津田を目標に使われたのだと思った。と、ふいにある敵愾心が起った。

「でも東京にだって、様々な候補者がありますでしょうよ」

あやめは顔だけは笑いながら言った。そして競争心の燃える三十女の深い目ざしをはじめてまっ正面から市川に注ぐことができた。

そのときから、あやめの気持は変った。あやめは立候補者としての市川をこまかく夫の津田とくらべた。すると、いままで彼の魅力だった部分が津田のために胸苦しく嫉妬されて仕方なくなった。

――こんなに快活で明るい市川のようなタイプが自分でスローガンの紙をはる率直さでぐんぐん食い込んで行っては、あやめが見てさえ官僚臭ののこっている津田など一とたまりもない。幸い東京と長野県と選挙区は別だけれども、こんな候補者こそ津田の一番の敵かもしれない。――

あやめはこんなことを思った。急に市川が憎らしくなった。

「わたし一度市川さんの闘士ぶりを拝見したいわ」

そう言ってからかう目で市川を見た。が、心の中では市川の顔を目ざしで意地悪く小突いている心地だった。

市川はあやめの気持の推移なぞ知る筈もなく、無邪気に民衆党の自慢を並べた揚句、

「問題は保守党と、民衆党との選挙の公約のちがいなんですがね。この事では実際僕津田先生と膝を交えてお話ししたい気持なんです」

「民衆党の公約の主なものは何ですの」

「やっぱり再軍備反対、平和護持です。この一枚看板でどこまでも押通しますよ」

市川は荘重なまでに二つの熟語の一語一語を区切って言った。神聖で絶対なものを口にするときの真剣な目の据え方をして、市川はあやめを見かえした。

「ああそう、そうなのね。保守党のは何かしら」

「結局再軍備ですよ。自衛とか何とか曖昧に言っていますがね」

やっぱりそうなのだ。そこがあやめの気持の一番弱い箇所だった。そこに触れられるともろもろの逆立っていた感情はげんなりと萎えてしまう。

津田の政党が再軍備を言っていることであやめはどれだけ嫌らぬ思いをしていることだろう。なついている店の女

店員たちでさえ津田のことを何とか彼とかかげ口するのは、皆、保守党の再軍備論への反感からだった。

あやめは、市川の一言で、抉りとられたようにだまってしまった。そして、市川の眩がさわっているディヴァンのあたりを翳った目でしばらく見ていた。

「おや、大分時間がたちましたね。この分ではとてもかえられませんでしょう」

市川は腕時計を見ながら立上った。

「あら、電話をすっかり忘れてしまって御免なさい。ちょっと待って下さいね——」

電話は解散ときいてから煩くなるのを見越して茶の間のしず子の机の受話器に切り換えてあった。あやめは柔かいコールドウェーヴの髪に受話器を押えつけて何度もオーダーした。が、面会人が押しかけている山木邸の電話は何度でも話中だった。

「では、名簿は、私が責任をもってお送りいたしましょう」

「そうしていただけば大変ありがたいですね」

念のため彼は名刺をよこした。

「御奮闘をいのりますわ」

あやめは、しんみり言って、彼が靴をはく間立っていた。するとさき程からの気持の起伏はすっかり均らされて、ひたすらに、彼の壮途を祝う潔い気持になった。それは、津田の当選を希う気持を延長したつつましい人妻の愛情のひろがりだった。

あやめは、立ったままややしばらく甘美な気分に気持よく浸っていた。すると、また、門の耳門があいて店をあずけている岩戸英子と三枝子とが同じバスだったらしく一緒に入って来た。

グレイのスーツのわかい岩戸英子と琉球紅形のきものに鮭ピンクの袋帯をしめた三枝子との組合せは、斜な玄関の灯の光の中でぱっとした明暗をつくった。

「とうとう来ないのよ。気もちのやりばがないもんだから、めちゃめちゃに池のまわりを歩いたわ」

三枝子はそばの英子なぞ無視して恨みがましく言った。

「まあその泥はどうしたの」

あやめは三枝子の草履や足袋の汚れに目をとめた。が、いずれも、きょうのあわれな彷徨を物語っているのだろうと返事よりさきに解釈してはいたが、

「何にしても、御愁傷様というより外仕方がないわね」

が、三枝子は、こんなことには馴れているのか、きらりと目を光らした瞬間、その話題はもう投げて、

「いま出て行ったのは誰？」

「日が早いわねえ、さすが三枝子さんだわ」

あやめはうつむいて笑っていた。笑いに紛らしてはいたが、市川の事を説明するのがひどく億劫だし、きょう彼から受けた印象をいままでの彼につけ加えると、どういう形の人間になるのか考えてみていない。しかし、三枝子には

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.